

新聞4コマ漫画が描く野田佳彦首相（前編）
首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2011～2012

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 1):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major National
Newspapers in Japan 2011-2012

水野 剛也
Takeya MIZUNO

はじめに 本論文の概要

本論文は、野田佳彦首相の在任期間中（2011年9月2日～2012年12月26日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本号に掲載する前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰する。

首相を描いた作品の質的分析は、本誌次号（第57巻・第1号）以降に掲載する予定の中編から開始する。中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）と「オフィス ケン太」（夕刊）を扱うつもりである。後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析する。

最後の結論では、分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成¹

政治・政治家を論評する上で、漫画は古くから主要な表現手段でありつづけてきた。政治漫画研究者の茨木正治によれば、政治漫画の嚆矢は、遅くとも15世紀末から16世紀のイギリスで発行された、宗教改革に関する1枚のパンフレットにさかのぼるといふ。²

政治漫画は、そのときどきの政情を題材とするため時事性が強く、それゆえ日々の出来事を報道する新聞とともに発展してきた。たとえば、アメリカでは植民地時代から現在まで、程度の差はあれ、政治漫画は新聞報道に不可欠な要素でありつづけている。アメリカのジャーナリズム界でもっとも権

威があるとされるピュリツァー賞には、早くも1922年に政治風刺漫画 (Editorial Cartooning) 部門が設けられ、同部門は21世紀に入っても存続している。日本でも、新聞が誕生した幕末の黎明期から現在にいたるまで、新聞紙面のなかで漫画はつねに一定の地位を占めてきた。時代や国を越えて、政治・政治家と漫画、そして新聞は切っても切れない密接な関係にある。³

ところで、世界的に見ても独自性が強い日本の新聞4コマ漫画は、政治・政治家をどのように描いているのであろうか。上述のとおり、日本の新聞も創成期から積極的に漫画を掲載してきたが、なかでも4コマ漫画は他国の新聞漫画と比較してユニークな存在である。どのようなニュースが起きようとも、ほぼ毎日必ず最終社会面の左上隅 (『朝日新聞』では2013年4月1日号より第2社会面の右上隅に移動) に掲載される4コマ漫画は、日本のほとんどの一般紙にとって「そこになくてはならない」ものであり、多くの読者にとっては読む・見ることが習慣づけられた定番アイテムである。漫画史研究者の清水勲も指摘しているように、「日本の四コマ漫画は新聞を中心に発展してきた」。もちろん、影響力も広範にわたり、「手塚治虫をはじめとする戦後ストーリー漫画の基礎を作った漫画家たちは、みな新聞の4コマ漫画に基礎を置いている」と論じる研究者もいる。しかし、その歴史の深さ、また人気・認知度の高さにもかかわらず、新聞4コマ漫画の内容を実証的・体系的に分析した学術研究はきわめて少ない。その政治的内容に光をあてた研究は、なおさら少ない。⁴

本論文は、これまでほとんど研究対象とされてこなかった新聞4コマ漫画に目をむけ、かつ、そのなかで日本の最高政治指導者である内閣総理大臣 (以後、首相) がいかに描かれているかを分析することで、上述の疑問の一端を解明しようとする試みである。

より具体的には、野田佳彦首相の在任期間 (2011年9月2日~2012年12月26日 = 482日) を時間枠として、3大全国紙 (『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』) の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画 (朝刊・夕刊とも) を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する。⁵

分析対象とした4コマ漫画の題名・作者名・掲載紙名は、以下のとおりである。

- ・「アサッテ君」 東海林さだお 『毎日新聞』 (朝刊)*
- ・「ウチの場合は」 森下裕美 『毎日新聞』 (夕刊)
- ・「コボちゃん」 植田まさし 『読売新聞』 (朝刊)
- ・「オフィス ケン太」 唐沢なをき 『読売新聞』 (夕刊)†
- ・「ののちゃん」 いしいひさいち 『朝日新聞』 (朝刊)
- ・「地球防衛家のヒトビト」 しりあがり寿 『朝日新聞』 (夕刊)

*「アサッテ君」は2014年12月31日号で13,749回をもって最終回を迎えた。一般全国紙の4コマ漫画としては最多連載記録であった。その後継として、2015年2月1日号から「桜田です!」 (いしかわじゅん) が連載を開始し、本論文執筆時点でも継続中であるが、野田の首相在任期間外であるた

め本論文では分析対象とはならない。

†「オフィス ケン太」の連載がはじまったのは2012年10月1日号から、つまり野田の首相就任から約1年1ヵ月後であるため、分析対象となるのは退任するまでの約3ヵ月間の作品だけである。なお、それ以前の『読売新聞』の夕刊社会面には、2004年7月2日号で「サンワリ君」（鈴木義司）が終了したのち、約8年3ヵ月間にわたり4コマ漫画は掲載されなかった。

分析対象を抽出する上でもっとも重要なのは、「首相を描いている作品」をいかに定義するかであるが、本論文はかなり狭義のそれを採用した。すなわち、「首相を描いている作品」を、次の2つの基準のいずれか、あるいは両方に合致するものに限定した。

- 1) 野田首相の身体、もしくはその一部を、首相本人であることを判別できる画像として描いている。
- 2) 「野田」・「ノダ」など、文字により直接的に野田首相に言及している。

上述のような狭義の基準を採用した理由は、首相その人が作品の題材として描かれていることが疑いようのない事実として客観的に確認できるもののみを扱うことで、分析対象の抽出（同時に分析から得られる知見）の安定性・確実性を最優先させるためである。もちろん、間接的・示唆的、その他の方法で首相を描いている（と思われる）作品は存在するし、それらに分析価値がないというわけではけっしてない。本論文でも、質的な分析をする際には、定義には合致しないものの首相と関連すると考えられる作品を補足的に分析に加える。しかし、類似した先行研究がきわめて限定されている現段階では、できるだけ狭義の定義を採用することで分析対象の抽出の精度を高め、可能なかぎり堅実な知見を示し、今後のさらなる研究につなげることが先決であると判断した。小泉純一郎、安倍晋三（第1次、以下略）・福田康夫、麻生太郎、鳩山由紀夫、および菅直人首相を描いた4コマ漫画を分析した先行研究（後注4参照）も、ほぼ同じ定義を採用している。なお、これら一連の先行研究は本論文にとって最重要、かつ他に類のない比較材料であるため、随所で「先行研究」として参照・引用するが、頻繁に言及するためそのつど後注をつけないことを断っておく。

分析にあたっては、これも先行研究にならい、マス・メディアのフレーム（枠組）概念にもとづく分析手法を援用する。ここでいうフレームとは、しばしば引用されるトッド・ギトリン（Todd Gitlin）の定義に従い、「言葉であるか画像であるかを問わず、シンボルの使い手が日常的に言説を構成する際に用いる、認知・解釈・表示の一貫したパターン、また選択・強調・排除の一貫したパターン」をさす。簡潔に言えば、媒体（新聞4コマ漫画）がどのような枠組・とらえ方・観点で対象（首相）を描いているかに着目する質的な分析手法である。ギトリンによれば、あらゆるジャーナリズム活動にとってフレームは不可避・不可欠な存在であり、ゆえにそれを分析するためにはフレームの構造を明らかにする必要がある。⁶

次に、本論文にはいくつか重要な意義があるが、主要なものとして以下の4点をあげることができる。

第1に、新聞の政治漫画を分析した先行研究のほとんどが1コマ漫画のみを対象としてきたのに対し、本論文は4コマ漫画という未開拓に近い領域に踏み込む。既述のとおり、4コマ漫画は日本の新聞界、および漫画界で無視できない人気と地位を誇っている。藤森照信の言葉を借りれば、「マンガファンならずとももっとも多くの人々が目を通しては新聞四コマ漫画にちがいない。日本のマンガの大通りというか広場にあたる」。にもかかわらず、その内容を学術的に分析しようとする努力はほとんどされてこなかった。たとえば、本論文の冒頭で触れた茨木正治は、政治漫画を理論的、かつ実証的に検討した日本では数少ない研究者の一人であるが、彼の一連の研究は1コマ漫画だけに焦点をあてている。⁷

関連して第2に、ただでさえ少ない新聞4コマ漫画の先行研究のなかでも、政治的な表現内容に着目してそれを実証的・体系的に分析する本論文のような試みは、なおさら希少である。その主因として、ある漫画研究者が指摘しているように、一般的に新聞4コマ漫画が「一種の清涼剤 [として] 読者に息抜きをさせる」ものとしか理解されていない点が考えられる。新聞4コマ漫画を質的に分析している若干の既存文献にしても、小泉から菅までの首相の描かれ方を解明した先行研究以外は、政治や政治指導者の描かれ方を研究対象としているわけではない。⁸

先行研究の希少性についてさらに付言すれば、本論文は自民党から政権を奪った民主党の3人目の首相を分析対象としている点で、そもそも少ない関連研究のなかでもことさらに希有な特長を有している。民主党は2009年8月30日に執行された衆議院総選挙で躍進し、念願の政権交代を実現させた。民主党から輩出した初の首相である鳩山、その後任である菅をさらに引き継いだ野田の描かれ方を分析する本論文は、自民党の首相（小泉・安倍・福田・麻生）を扱った既存の研究に対して、有力な比較検討材料を提供することができる。もちろん、本論文により、同じ民主党の首相である鳩山・菅との対比も可能となる。さらに、本論文を足がかりに民主党から政権を奪い返して再登板した安倍晋三（第2次）、およびそれ以後の首相を取りあげる事例研究が進展すれば、政権交代が新聞4コマ漫画に与えた影響をより長い時間枠で究明することもできる。

なお、「サザエさん」（『夕刊フクニチ』・『新夕刊』を経て『朝日新聞』、長谷川町子）に関しては例外的に多くの作品論が存在するが、本論文のように政治指導者の描き方に注目しているわけではないし、その多くは学術研究というよりは大衆むけの教養・娯楽書である。既述の点とあわせ、本論文には、既存の新聞4コマ漫画研究が見落としてきた領域を新たに開拓する意義がある。⁹

第3に、本論文には政治的コミュニケーション学の観点からも重要な意義を見いだすことができる。画像と文字を組みあわせることのできる漫画表現には、受け手の政治認識に与える影響やジャーナリズムの権力監視・番犬機能という点で、無視できない特性がある。フェルドマン・オフェル（Feldman Ofer）は、「マンガは、現代国家において、政治的コミュニケーションの重要な役割を担っている。これは読者に昨今の政治社会状況を知らしめると同時に、その状況を雄弁に解説し、国内外

の事態についての理解に役立っている」と指摘している。前述の茨木も、政治を扱うことで漫画は「読み手である一般庶民に情報を提供し、あわせて政治権力をつかさどる様子を批判的に表して……政治における認識と態度を形成する一助となる」と論じている。漫画を専門領域としている論者ばかりではない。アメリカ史研究者の金澤宏明も、「民衆に対して政治意識を流布し、賛同あるいは批判を促す媒体」としての政治漫画の史的価値を評価している。政治認識を形成・反映する機能や権力監視・番犬機能が1コマ漫画だけに認められて、新聞4コマ漫画に認められないと考える根拠はない。本論文は、新聞4コマ漫画の政治的コミュニケーションとしての機能・性質の理解にも貢献することができる。¹⁰

本論文の構成についても説明しておく。まず、次項「2 量的な側面から見た全体的な傾向」では、分析期間から抽出した作品群を集計し、量的な側面から全体的な傾向を把握する。それをふまえ、「3 新聞4コマ漫画が描く野田首相」で作品の質的な内容分析をおこなう。最後の「4 結論分析・知見の総括」では、それまでに得た分析・知見を総括し、先行研究とも比較しながら今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能などについて全体を通して得られる若干の考察を示す。

紙幅制限のため、本論文は前編・中編・後編・結論にわけて掲載する予定である。本号掲載の前編では、「2 量的な側面から見た全体的な傾向」までをまとめる。本誌次号（第57巻・第1号）以降に掲載する予定の中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）と「オフィス ケン太」（夕刊）の質的内容分析をおこなうつもりである。後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析する。結論では、分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示する。

最後に、本論文中で言及する人物の役職等はすべて当時のもので、敬称は省略している。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本項では、本論文の主目的である質的な内容分析をおこなう前段階として、野田首相を描いた新聞4コマ漫画を量的な側面から見ることで、その全体像を俯瞰する。

知見・分析の記述に移る前に、量的なアプローチをとる本項では、前述した「首相を描いている作品」の定義に合致しない作品や在任期間外に掲載された作品は、すべて除外してあることを断っておく。量的な手法を採用するがゆえに、明確な基準で取捨選択をする必要があるからである。もちろん、厳密には定義に合致しなくても、あるいは在任期間外であっても、本論文の趣旨に照らして参照すべき作品はある。それらは、質的な分析をする次項（本誌次号以降に掲載する予定の中編・後編）で補足的に扱う。

まず、もっとも基本的な作業として、野田首相の在任期間中（2011年9月2日～2012年12月26日）、各4コマ漫画がどのくらいの頻度（割合のこと。以後「頻度」で統一する。小数点以下第3桁は切り

捨て)と本数で首相を登場させたかを調べたところ、表1のような結果が得られた。表2は、野田とそれ以前の首相を比較するために、表1と先行研究の数値を統合したもの、表3は頻度を基準に「描かれやすい」首相を高い順にならべたものである。

3大紙の4コマ漫画の全体的な特徴として、これらの表から少なくとも4つの重要な点を指摘することができる。第1の点は先行研究が示している知見と基本的に重複するが、それ以外の3点は野田の在任期間中に特有に見られる特徴である。

第1に、先行事例ほどではないにせよ、依然として首相を描く漫画と描かない漫画との間にへだたりがある(表1・2)。小泉から麻生までの自民党の4人の首相、および民主党の鳩山・菅の2人も、先行研究が「時事的4コマ漫画」と特徴づけた「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」では一定の頻度・本数で描かれていた。対照的に、「家庭的4コマ漫画」である「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」では、ほとんど描かれていなかった。この特徴は、野田が首相に就任してからも基本的に変っていない。家庭漫画では「コボちゃん」の1本に対して(「オフィス ケン太」も家庭漫画に該当する。この点は次項以降で詳説する)、時事漫画では「アサッテ君」の5本と「地球防衛家のヒトビト」の4本と明らかな差がある。

ただし第2に、両者のかい離はそれ以前ほど大きくない。家庭漫画が首相をほとんど登場させない点は変わらないが、時事漫画に目を転じると、以前ほど多く描いていないからである(表2)。とくに、先行研究が「自己主張型」の時事漫画と特徴づけた「地球防衛家のヒトビト」の落ち幅は^{かつもく}刮目に値し、野田の頻度・本数(1.03%、4本)はともに小泉以降もっとも低い値である。「世論反映型」の時事漫画である「アサッテ君」でも、野田の頻度(1.13%)は福田・小泉について3番目に低く、本数(5本)は福田について2番目に少ない。

上述の点に関連して第3に、時事漫画(とくに「地球防衛家のヒトビト」)が首相をさほど活発に描かなかったことで、野田は歴代の誰よりも「描かれにくい」首相となっている。在任期間が異なるため頻度を基準に「描かれやすさ」を順位づけると、小泉以降の7人中、野田(0.45%)は最下位である(表3)。単純に計算すると、3大紙の4コマ漫画全体で2ヵ月に1本強しか描かれていないことになる。同じ民主党の首相と頻度を比較すると、もっとも「描かれやすい」鳩山(1.73%)の約4

表1 野田首相を描いた作品の頻度と本数(漫画別)

「アサッテ君」(東海林さだお)	『毎日新聞』(朝刊)	1.13% (439本中5本)
「ウチの場合は」(森下裕美)	『毎日新聞』(夕刊)	0.00% (376本中0本)
「コボちゃん」(植田まさし)	『読売新聞』(朝刊)	0.21% (468本中1本)
「オフィス ケン太」(唐沢なをき)	『読売新聞』(夕刊)	0.00% (71本中0本)
「ののちゃん」(いしいひさいち)	『朝日新聞』(朝刊)	0.00% (468本中0本)
「地球防衛家のヒトビト」(しりあがり寿)	『朝日新聞』(夕刊)	1.03% (386本中4本)
合 計		0.45% (2,208本中10本)

表2 小泉から野田までの首相を描いた作品の頻度と本数（漫画別）

	小泉*	安倍	福田	麻生	鳩山	菅	野田
「アサッテ君」	0.87% (1,825本中16本)	2.37% (337本中8本)	0.59% (335本中2本)	2.38% (335本中8本)	2.70% (259本中7本)	1.56% (384本中6本)	1.13% (439本中5本)
「ウチの場合は」	0.00% (1,318本中0本)	0.40% (245本中1本)	0.00% (280本中0本)	0.00% (275本中0本)	0.00% (209本中0本)	0.00% (339本中0本)	0.00% (376本中0本)
「コボちゃん」	0.05% (1,922本中1本)	0.00% (356本中0本)	0.28% (355本中1本)	0.00% (347本中0本)	0.00% (259本中0本)	0.00% (441本中0本)	0.21% (468本中1本)
「オフィス ケン太」							0.00% (71本中0本)
「ののちゃん」	0.20% (1,927本中4本)	0.00% (354本中0本)	0.00% (355本中0本)	0.00% (348本中0本)	0.61% (163本中1本)	0.00% (441本中0本)	0.00% (468本中0本)
「地球防衛家の ヒトビト」	3.10% (1,320本中41本)	3.72% (295本中11本)	2.72% (294本中8本)	4.86% (288本中14本)	5.31% (207本中11本)	4.89% (368本中18本)	1.03% (386本中4本)

*小泉は表中にある5つの漫画以外に、「まっぴら君」（『毎日新聞』夕刊）、「サンワリ君」（『読売新聞』夕刊）、「ワガハイ」（『朝日新聞』夕刊）でも描かれている。作品の詳細な分析は先行研究（後注4参照）がおこなっている。

分の1、全体ではちょうど中間に位置する菅（1.21%）でさえその半分にも届かない。頻度だけでなく総本数においても、野田（10本）は福田（11本）を下回りもっとも少ない。在任期間で野田（482日）が福田（365日）を117日も上回っているにもかかわらず、である。

最後の第4の点は、僅差ではあるが、頻度・本数いずれにおいても、はじめて「地球防衛家のヒトビト」（1.03%、4本）が「アサッテ君」（1.13%、5本）を下回ったことである。表2が示すように、小泉から菅までは一貫して「地球防衛家のヒトビト」が「アサッテ君」を上回っていたが、野田ではじめて逆転現象が起きている。もっとも、「下回った」と表現したように、「アサッテ君」がより積極的に首相を描くようになったわけではない。既述のとおり、「アサッテ君」が野田を描いた頻度は他の首相に比べてむしろ低い。主因は、「地球防衛家のヒトビト」の数値が大幅に低下し、これまでの最低値となったことである。「地球防衛家のヒトビト」においては、野田について「描かれにくい」福田（2.72%、8本）と比較しても、頻度・本数ともに半分以下である。

上述の点に付言すると、確かに「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」の差は数的にはわずか

表3 頻度を基準とした「描かれやすさ」の順位（首相別、高い順）

鳩山	1.73% (1,097本中19本)
麻生	1.38% (1,593本中22本)
安倍	1.26% (1,587本中20本)
菅	1.21% (1,973本中24本)
小泉	0.83% (9,565本中80本)
福田	0.67% (1,619本中11本)
野田	0.45% (2,208本中10本)

であるが、これまでの経緯に照らせば、両者の順位が逆転した意味はけっして小さくない。なぜならば、小泉から菅まではつねに「地球防衛家のヒトビト」が「アサッテ君」を、ときに圧倒的といえる大差をつけて上回っていたからである。とくに菅の在任期間中は頻度・本数ともに3倍以上、福田では4倍以上もの開きがあった(表2)。くり返すが、逆転の主因は「地球防衛家のヒトビト」の首相描写が急減したことである。

表4 「家庭的4コマ漫画」(「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」)における首相を描いた作品の頻度と本数(首相別)

小泉	0.09% (5,440本中5本)*
安倍	0.10% (955本中1本)
福田	0.10% (990本中1本)
麻生	0.00% (970本中0本)
鳩山	0.15% (631本中1本)
菅	0.00% (1,221本中0本)
野田	0.07% (1,383本中1本)†

*小泉の在任期間中に連載されていた「ワガハイ」(『朝日新聞』夕刊)の数値を含む。

†野田の在任期間中に連載を開始した「オフィスケン太」(『読売新聞』夕刊)の数値を含む。

前述のとおり、野田は家庭的4コマ漫画では「コボちゃん」の1本でしか描かれていないが、表4が示しているように、そのこと自体は他の首相と大きく変わらない。首相が家庭漫画に登場することはほとんどない、という共通の土壌に根ざした相対的に軽微な差異である。やや目立つのが小泉の5本で、しかもそのうち4本が「ののちゃん」である点は特異であるが、母数の大きさを考えれば、他の首相に比べとくに小泉が家庭漫画で「描かれやすい」わけではない。少なくとも量的な側面では、民主党による政権交代を前後して、家庭漫画のきわめて消極的な首相描写はまったく変化していない。

次に、首相を描いた作品の頻度と本数を所属政党で比べたのが表5であるが、全漫画の合計で民主党(1.00%)が自民党(0.92%)をやや上回るものの、それほど大きな差があるわけではない。政権交代をなし遂げた民主党初代首相の鳩山は多く描かれているが、つづく菅・野田の描かれる機会が減っていったことで(表3)、全体としては自民党の首相と同程度の「描かれやすさ」に落ち着いている。

つまり、量的な側面を長期的に見れば、2009年の政権交代を境に根本的な変動があったわけではなく、これは新聞4コマ漫画の首相描写を理解する上できわめて重要な知見である。なお、単純に計算すると、小泉から野田までの約11年8ヵ月間、3大紙の4コマ漫画全体では平均して1ヵ月に約1.3本の作品に首相が登場していたことになる。

漫画ごとに見ても、先行研究が指摘するそれぞれの特徴が、やはり政権交代の前後でほぼ変わって

表5 所属政党ごとに見た首相を描いた作品の頻度と本数（漫画別、および全漫画の合計）

	自民党（小泉・安倍・福田・麻生）	民主党（鳩山・菅・野田）
「アサッテ君」	1.20%（2,832本中34本）	1.66%（1,082本中18本）
「ウチの場合は」	0.04%（2,118本中1本）	0.00%（924本中0本）
「コボちゃん」	0.06%（2,980本中2本）	0.08%（1,168本中1本）
「オフィス ケン太」		0.00%（71本中0本）
「ののちゃん」	0.13%（2,984本中4本）	0.09%（1,072本中1本）
「地球防衛家のヒトビト」	3.36%（2,197本中74本）	3.43%（961本中33本）
全漫画の合計	0.92%（14,364本中133本）*	1.00%（5,278本中53本）

*小泉の在任期間中に連載されていた「まっぴら君」（『毎日新聞』夕刊）、「サンワリ君」（『読売新聞』夕刊）、「ワガハイ」（『朝日新聞』夕刊）の数値を含む。

いないことがわかる。「アサッテ君」でやや開きがあるものの（自民党=1.20%、民主党=1.66%）、それ以外では目立つ差異は認められない。「オフィス ケン太」を含め家庭漫画はいずれもきわめて低い数値を示しているし（表4も参照）、逆に時事漫画は比較的に活発に首相を描いている。とくに「地球防衛家のヒトビト」は、野田を例外として、いずれの政党の首相に対しても他の漫画をはるかに上回る積極性を見せており（自民党=3.36%、民主党=3.43%）、両党とも全漫画の合計の約6割を占めている。少なくとも量的に見る限りは、政権交代や首相の所属政党には大きく左右されずに、それぞれの漫画が、それぞれの特徴を保持しつづけているといえる。

次に、野田のデータを新聞別、朝・夕刊別に集計したところ表6と表7のようになり、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」が逆転した影響でいずれも先行研究とは異なる結果となった。

まず、新聞別では頻度・本数とも高い順に『毎日新聞』>『朝日新聞』>『読売新聞』となり（表6）、上位2紙の順位が入れ替わった。小泉から菅までは、つねに『朝日新聞』>『毎日新聞』>『読売新聞』の順であった。

他方、朝・夕刊別では、これまでと同じく頻度では夕刊が、しかし本数では朝刊がわずかに上回り（表7）、やはり先行研究とは異なる結果となった。小泉から菅までは、頻度・本数ともにつねに夕刊

表6 野田首相を描いた作品の頻度と本数（新聞別）

『毎日新聞』	0.61%（815本中5本）
『読売新聞』	0.18%（539本中1本）
『朝日新聞』	0.46%（854本中4本）

表7 野田首相を描いた作品の頻度と本数（朝・夕刊別）

朝刊	0.43%（1,375本中6本）
夕刊	0.48%（833本中4本）

が朝刊に大差をつけていた。野田の在任期間中にはじめて、本数においてのみ朝刊と夕刊が入れ替わったわけである。あらためて表6と表7の要点をまとめると、新聞別、朝・夕刊別の順位でともに逆転現象が起きていることがわかった。

しかし、新聞別、朝・夕刊別の数値の意味づけ・解釈には慎重にならざるをえない。なぜならば、これらの変化はあくまで、「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」の逆転をほぼそのまま反映しているにすぎないからである。先行研究も指摘しているように、首相を描く漫画と描かない漫画がはっきりわかれているだけに、新聞別、朝・夕刊別の比較だけから合理的な判断は下しにくい。だからこそ、異なる漫画を横断的にまとめて全体的な傾向を把握する一方で、漫画ごとにその特質や傾向を詳しく検討する作業が重要となる。本論文が質的分析に主軸を置くのはそのためである。なお、野田の首相就任から約1年1ヵ月間は、『読売新聞』の夕刊社会面には4コマ漫画が掲載されていなかった(2012年10月1日号から「オフィス ケン太」が連載開始)ことにも留意しておくべきである。

参考までに、小泉から野田までのデータを統合し、新聞別、朝・夕刊別の集計をさらに所属政党ごとに比較すると表8と表9のようになり、先行研究とまったく同じ結果に落ち着く。つまり、新聞別では頻度・本数とも高い順に『朝日新聞』>『毎日新聞』>『読売新聞』となり、朝・夕刊別では夕刊>朝刊となる。入れ替わりのあった野田はあくまで例外であり、全体的に見ればこれらの順位はきわめて堅固であることがわかる。自民党・民主党いずれにおいても、『朝日新聞』と『毎日新聞』が『読売新聞』を、また夕刊が朝刊を大きく引き離している。なお、『読売新聞』以外、民主党のほうが自民党よりもやや頻繁に描かれていることも(表8)、すでに指摘した知見(表5)と同一である。

表8と表9に見られる結果を総合すると、21世紀最初期の3大紙においては、『朝日新聞』と『毎日新聞』の4コマ漫画は首相を描くことに相対的に積極的、対して『読売新聞』ははるかに消極的、また朝刊よりも夕刊のほうがはるかに積極的、そして自民党よりも民主党の首相がやや多く描かれているが大きな差があるわけではない、と一般化することができる。朝・夕刊の差については、朝刊の家庭漫画に対して夕刊は時事漫画、というのが新聞4コマ漫画の典型的パターンであると指摘する漫

表8 所属政党ごとに見た首相を描いた作品の頻度と本数(新聞別)

	自民党 (小泉・安倍・福田・麻生)	民主党(鳩山・菅・野田)	合計
『毎日新聞』	0.78% (4,993本中39本)	0.89% (2,006本中18本)	0.81% (6,999本中57本)
『読売新聞』	0.40% (3,917本中16本)	0.08% (1,239本中1本)	0.32% (5,156本中17本)
『朝日新聞』	1.43% (5,454本中78本)	1.67% (2,033本中34本)	1.49% (7,487本中112本)

表9 所属政党ごとに見た首相を描いた作品の頻度と本数(朝・夕刊別)

	自民党(小泉・安倍・福田・麻生)	民主党(鳩山・菅・野田)	合計
朝刊	0.45% (8,796本中40本)	0.60% (3,322本中20本)	0.49% (12,118本中60本)
夕刊	1.67% (5,568本中93本)	1.68% (1,956本中33本)	1.67% (7,524本中126本)

画家もおり、そのことが量的な分析で実証的に裏づけられたといえる。もちろん、首相を描く漫画と描かない漫画がかい離していることには留意しておかなければならない。¹¹

次に、内閣の平均支持率と首相を描いた作品数を、在任期間を前半と後半にわけて比較した

ところ、表10のような結果が得られた。2011年9月2日から2012年12月26日までが野田の在任期間であるから、前半は2011年9月から2012年4月まで、後半は2012年5月から同年12月までとした。

支持率が比較的に高い前半（35.0%）、低い後半（23.0%）ともに5本と均等に割れており、全体的に見れば支持率の高低には左右されずに描かれているように映る。この特徴を歴代の首相と比較すると、ごく大まかな分類ではあるが、描かれる時期に偏りがあった小泉・安倍・福田よりも、どちらかといえば大きな偏りなく均等に描かれた麻生・鳩山・菅に近いといえる。

より詳しく月別に集計した表11を見ても、やはり、支持率の推移と首相の登場回数との間に際立つ

表10 野田内閣の平均支持率と首相を描いた作品数*

	平均支持率	本数
前半（2011年9月～2012年4月）	35.0%	5本
後半（2012年5月～2012年12月）	23.0%	5本

*前半・後半の平均支持率は、表11の月別の支持率から算出した（小数点以下第2桁は切り捨て）。

表11 野田内閣の平均支持率と首相を描いた作品数（月別）*

	支持率	合計	「アサッテ君」	「コボちゃん」	「地球防衛家のヒトビト」
2011年9月	53%	3	1	0	2
10月	48%	0	0	0	0
11月	40%	2	1	1	0
12月	31%	0	0	0	0
2012年1月	29%	0	0	0	0
2月	27%	0	0	0	0
3月	27%	0	0	0	0
4月	25%	0	0	0	0
2012年5月	26%	0	0	0	0
6月	27%	1	1	0	0
7月	25%	0	0	0	0
8月	22%	0	0	0	0
9月	25%	1	1	0	0
10月	20%	1	0	0	1
11月	19%	1	1	0	0
12月	20%	1	0	0	1
		10	5	1	4

*内閣の月別の支持率は朝日新聞社の世論調査（朝日RDD方式、定例・緊急）から算出した。同じ月に複数回の調査が実施されている2012年6月・10月・11月・12月は、その平均値を算出（小数点以下は切り捨て）した。

た関係性は浮かびあがってこない。そもそも、「もっとも描かれにくい」野田は作品総数が10本と少ないこともあり、歴代の首相ほど目立つ特徴は見いだしにくい。

ただし、表11を過去の首相のそれと比較してあえて類型化すれば、初期型と後期型をあわせもち、かつ中盤でほとんど描かれない「中抜け型」と特徴づけられるかもしれない。支持率が比較的に高い最初の3ヵ月に全体の半数の5本、逆に支持率が20%前後まで落ちた最後の4ヵ月に4本ある一方、その間の9ヵ月には1本しか描かれていないからである。野田が「もっとも描かれにくい」首相となった背景を考える上で、この中盤の大きな空白は留意しておくべきだろう。

参考までに、野田以前の首相の大まかな特徴を先行研究にしたがって概説しておく、小泉はまれに見る高支持率を維持した就任初年にもっとも多く描かれた「初期型」、安倍と福田は突然の辞任表明後に描かれる機会が急増した「後期型」、麻生・鳩山・菅は比較的に起伏の少ない「安定分散型」と類型化されている。くり返すが、野田はどの型にも適合せず、初期と後期には描かれているが、中盤でほとんど描かれない「中抜け型」といえるような特徴をもつ。もっとも、これらの類型は厳密なものではなく、互いに完全に排他的でもない。野田の「中抜け型」を含めて、今後あらたな事例を積みかさねていく過程で修正・変更・追加する必要に迫られる可能性は十分に残されている。

先行研究が示した仮説——首相が描かれる多寡に影響を与えるのは支持率の数字そのものよりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである——の適合性についても、野田が「もっとも描かれにくい」首相であるだけに、判断がつきにくい。仮説は基本的に「描かれる理由」を説明づけようとするもので、「描かれない理由」の解釈には適さないからである。首相の「描かれやすさ(にくさ)」と内閣支持率や社会的注目度との関係の理論化にむけては、量的・質的の両面から、今後もさらに研究を積みかさねることが必須である。

ただし、最初期に限れば、仮説はある程度の妥当性を発揮していると解釈できなくもない。全体の半数の5本が描かれている就任当初の3ヵ月は、民主党代表選の政見表明でみずからを「どじょう」にたとえた点も含めて、新しく誕生した首相に対する社会の関心が高まっていた時期とかさなるからである。とくに首相に就任した2011年9月の3本は、いずれも「新首相が登場した」こと自体を題材としている。社会的な注目度を重視する仮説で合理的に説明できる。

いずれにせよ、野田の「描かれにくさ」を理解するには、作品総数が少ないわけであるから、量的よりも質的な分析をとくに重視すべきである。社会・政治的な動向や「首相を描いている作品」の定義に合致しない作品も含めて、より広い視野で野田政権中の4コマ漫画を考察できるからである。既述のとおり、本論文が質的分析に主軸を置くのはそのためである。

最後に、野田を示すシンボル(画像・文字・画像と文字)を漫画ごとに分類し集計したのが表12、野田とそれ以前の首相を比較するために表12の合計値と先行研究の数値を統合し、かつ所属政党ごとにまとめたのが表13であるが、全体的に見ればシンボル使用に極端な偏りはないことがわかる。

まず、野田を描いた作品では、画像も文字もほぼ同程度に用いられている。「画像のみ」が4本と最多であるが、「文字のみ」も3本あり、その差はわずか1本しかない(表12)。なお、民主党の他の

首相と比較すると（表13）、鳩山では画像が多用され、逆に菅では文字が多用されており、その中間でバランスがとれているのが野田であることがわかる。

視野を拡大して小泉から野田までを俯瞰しても、やはりほぼ均等なシンボル使用が認められる。個別に見れば偏りもなくはないが、全体を合計すると画像・文字ともほぼ同程度に用いられている（画像のみ=63本、文字のみ=67本、併用=56本）。所属政党ごとに比較しても、自民党はやや文字が多く（画像のみ=45本、文字のみ=52本、併用=36本）、逆に民主党はやや画像が多いものの（画像のみ=18本、文字のみ=15本、併用=20本）、極端な差があるとはいえない。

しかし、先行研究もくり返し指摘しているように、シンボル使用については依然として手堅い知見を見いだせていないのが現状である。前述のとおり、首相によっては偏りがある一方、全体的には均衡がとれているが、これまでの分析では、いずれの結果についてもその決定要因を導きだせていないからである。

とくに、画像・文字のいずれが多用されても（また均等に使用されても）、それなりに合理的な解釈・説明が可能であることが、シンボル使用に関する考察を難解にしている。まず、漫画という表現

表12 野田首相を示すシンボル（漫画別）

	画像のみ	文字のみ	画像と文字（併用）
「アサッテ君」	2本	1本	2本
「ウチの場合は」	0本	0本	0本
「コボちゃん」	0本	1本	0本
「ののちゃん」	0本	0本	0本
「地球防衛家のヒトビト」	2本	1本	1本
合 計	4本	3本	3本

表13 小泉から野田までのシンボルの合計値（首相・所属政党別）

	画像のみ	文字のみ	画像と文字（併用）
小泉	27本	39本	14本
安倍	8本	5本	7本
福田	3本	3本	5本
麻生	7本	5本	10本
自民党合計	45本	52本	36本
鳩山	11本	3本	5本
菅	3本	9本	12本
野田	4本	3本	3本
民主党合計	18本	15本	20本
全体の合計	63本	67本	56本

形態を考えれば、画像の使用が文字を上回ったとしても不自然ではない。しかし反対に、4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくいいため文字により説明的に首相を描く必要性が高まる、と解釈することも十分に可能なのである。実際、小泉から野田までの7人の数値を合計すれば、表13が示すように、若干ではあるがむしろ文字が画像を上回っている（画像のみ=63本、文字のみ=67本、併用=56本）。漫画であるがゆえ画像が多用されても何ら不思議ではないが、同時に4コマ漫画だからこそ他の形態の漫画に比べ文字が大きな役割をはたしているともいえるのである。どちらに偏ったとしても、説得的な理由づけができるわけである。もちろん、双方が均等に使用されている場合は、2つの解釈が同程度に作用していると理解できる。

補足として、数値などにより実証的に裏づけられるわけではないが、単純に容姿の「描きやすさ（にくさ）」がシンボル使用に影響を与えている可能性も完全には捨て切れない。安倍晋三（第1次）が突然に辞意を表明した直後、「地球防衛家のヒトビト」の作者・しりあがり寿は、作品中（2007年9月15日号）に「某漫画家」を登場させ、次は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と語らせている。「某漫画家」が作者自身であることは明白で、外見的な「描きやすさ（にくさ）」を重視していることがわかる。¹²

上述の点に関連して、野田が「もっとも描かれにくい」首相となったことも、同じく顔や身体の「描きにくさ」で説明できなくもない。本論文の後編で詳しく論じる予定であるが、前段落で言及したしりあがり寿は、野田を描いた最後の作品（2012年12月20日号）でも、登場人物のカーサンに「最後まで似顔絵が似なかったね…」といわせている。この発言に照らせば、少なくともしりあがりにとっては、野田は単に「似顔絵を描きにくい」首相だったのかもしれない。もっとも、漫画家から見た画像としての首相の「描きやすさ（にくさ）」は、すぐれて主観的な要素であるため、少なくとも本論文だけでは実証的に突きとめることのできない問題である。

いずれにせよ、容姿など外見的・身体的な描きやすさ（にくさ）も含め、シンボル使用についてより蓋然性の高い知見を得るには追加的な研究を要する。

注

- 1 本論文、とくに導入部分である本項には、後注4で列挙する筆者自身の先行研究と重複する部分が多くあることを断っておく。
- 2 茨木正治『メディアのなかのマンガ 新聞一コママンガの世界』（臨川書店、2007年）、16。
- 3 新聞漫画を含め、アメリカ・ジャーナリズム史を要領よく概説した研究書として、Edwin Emery and Michael Emery with Nancy L. Roberts, *The Press and America: An Interpretive History of the Mass Media* 9th ed., (Needham Heights, MA: Allyn and Bacon, 2000) がある。日本における新聞漫画の歴史を概説した主要な文献としては、川崎市市民ミュージアム編『日本の漫画300年』（川崎市市民ミュージアム、1996年）、清水勲『図解 漫画の歴史』（河出書房新社、1999年）、ニュースパーク（日本新聞博物館）編・春原昭彦監修『新聞漫画の眼 人 政治 社会』（ニュースパーク、2003年）、清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、などがある。
- 4 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、180、徐園『日本における新聞連載子ども漫画の戦前史』（日本僑報社、2013年）、6。新聞4コマ漫画の政治的内容を学術的な方法で検討した数少ない先行研究として、小泉純一郎、安倍晋三・福田康夫、麻生太郎、鳩山由紀夫、および菅直人首相を事例と

した一連の論文がある。

小泉に関する論文は、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（前編）」『情報研究』第37号（2007年7月）：47～84、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（後編）」『情報研究』第38号（2008年1月）：23～58、である。なお、水野剛也「漫画のなかの小泉純一郎首相 首相在任期間中の『朝日新聞』4コマ漫画を中心として」『朝日総研レポート（AIR21）』第206号（2007年7月）：16～53は、上述の論文から『朝日新聞』の4コマ漫画の分析部分を抜粋したダイジェスト版である。

安倍・福田に関する論文は、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（前編）両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第1号（2010年1月）：5～13、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（中編）両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第2号（2010年3月）：21～34、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（後編）両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第48巻・第1号（2010年12月）：61～78、である。

麻生に関する論文は、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（前編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第48巻・第2号（2011年3月）：19～28、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（中編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第49巻・第1号（2012年1月）：57～81、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（後編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第49巻・第2号（2012年3月）：59～83、である。

鳩山に関する論文は、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（前編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第50巻・第1号（2012年12月）：21～35、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（中編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第50巻・第2号（2013年3月）：19～36、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（後編-1）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第51巻・第1号（2014年1月）：5～12、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（後編-2）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第51巻・第2号（2014年3月）：5～21、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（結論）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第52巻・第1号（2014年11月）：33～45、である。

菅に関する論文は、水野剛也「新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（前編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011」『社会学部紀要』第52巻・第2号（2015年3月）：15～29、水野剛也「新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（中編）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011」、『社会学部紀要』第53巻・第1号（2015年11月）：79～103、水野剛也「新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（後編-1）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011」『社会学部紀要』第53巻・第2号（2016年3月）：63～68、水野剛也「新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（後編-2）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011」『社会学部紀要』第55巻・第1号（2018年1月）：21～41、水野剛也「新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（結論）首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011」『社会学部紀要』第55巻・第2号（2018年3月）：5～16、である。

5 前任の菅首相は2011年8月26日に正式に辞意を表明し、8月29日の民主党代表選で野田佳彦財務大臣が当選したことを受け8月30日に総辞職し、同日、野田は衆参両議院で第95代首相に指名されている。しかし、野田が天皇による認証式を受け、正式に内閣を発足させたのは9月2日である。このため、菅内閣は総辞職した8月30日から9月2日まで「職務執行内閣」としてとどまっている。

6 Todd Gitlin, *The Whole World is Watching: Mass Media in the Making and Unmaking of the New Left* (Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, 1980), 7. フレーム概念を政治漫画分析に関連づけて概説した先行研究として、茨木正治『「政治漫画」の政治分析』（芦書房、1997年）、茨木正治「政治漫画に見る内閣 選挙報道における森喜朗内閣と小泉純一郎内閣」『北陸法學』第9巻・第2号（2001年）：29～50、などがある。ニュースのフレームについては、Gaye Tuchman, *Making News: A Study in the Construction of Reality*

(New York: Free Press, 1978) なども参考になる。他方、フレームはその定義や使い方が多種多様で、別言すれば統一性に欠けるという問題もある。この点については、Robert M. Entman, "Framing: Toward Clarification of a Fractured Paradigm," *Journal of Communication* Vol.43, No. 4 (Autumn 1993): 51-58、竹下俊郎「議題設定とフレーミング 属性型議題設定の2つの次元」『三田社会学』第12号 (2007年): 4~18、などが要領よく整理している。

- 7 藤森照信「今週の本棚 紙面左上に君臨する『政権』の起承転結」『毎日新聞』2009年11月15日。もちろん、新聞の1コマ漫画はまさに政治・政治家を批評・風刺することを主目的としており、それゆえに先行研究が1コマ漫画を優先してきたことには十分な根拠がある。
- 8 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』(ミネルヴァ書房、2009年)、8。新聞4コマ漫画を質的に分析している文献として、次のようなものがある。高坂文雄『笑う戦後史』(トランスビュー、2002年)、岩本茂樹『戦後アメリカニゼーションの原風景『ブロンディ』と投影されたアメリカ像』(ハーベスト社、2002年)、岩本茂樹『憧れのブロンディ 戦後日本のアメリカニゼーション』(新曜社、2007年)、岩本茂樹『アメリカ漫画『ブロンディ』へのまなざし 『夫の家事労働』をめぐって』『メディア・コミュニケーション』第58号 (2008年3月): 43~53。
- 9 長谷川町子の「サザエさん」は、1946年4月に『夕刊フクニチ』で連載を開始し、『新夕刊』を経て1949年12月から『朝日新聞』(夕刊)、1951年4月から1974年2月まで『朝日新聞』(朝刊)で連載された4コマ漫画であるが、新聞にとどまらず、映画・ラジオ・アニメ・テレビドラマなど、さまざまなメディアを通して広く親しまれた。そのためか、他の漫画に比べ「サザエさん」を論じた文献は格段に多い。主要な文献として、次のようなものがある。東京サザエさん学会編『磯野家の謎』(飛鳥新社、1992年)、樋口恵子『サザエさんからいじわるばあさんへ 女・子どもの生活史』(ドメス出版、1993年)、新藤謙『サザエさんとその時代』(晩聲社、1996年)、清水勲『サザエさんの正体』(平凡社、1997年)、清水勲『古きよきサザエさんの世界』(いそっぷ社、2002年)、朝日新聞 be 編集部編『サザエさんをさがして』(朝日新聞社、2005年)、朝日新聞 be 編集グループ編『サザエさんをさがして その2』(朝日新聞社、2006年)、鶴見俊輔・齋藤慎爾編『サザエさんの〈昭和〉』(柏書房、2006年)、朝日新聞 be 編集グループ編『またまたサザエさんをさがして』(朝日新聞社、2007年)、朝日新聞 be 編集グループ編『サザエさんパンダを見に行く サザエさんをさがして その4』(朝日新聞社、2009年)、朝日新聞 be 編集グループ編『原っぱで夕焼けを見ていた頃 サザエさんをさがして その5』(朝日新聞社、2010年)、清水勲『サザエさん事典』(いそっぷ社、2013年)、志田英泉子『サザエさんキーワード事典 戦後昭和の生活・文化誌』(春秋社、2017年)。
- 10 フェルドマン・オフェル「政治マンガに見る『日本の首相』」『潮』1993年12月号: 120、茨木『「政治漫画」の政治分析』190、金澤宏明「史料としての合衆国の政治カートゥーン アメリカ対外関係史研究と図像分析」『アメリカ史研究』第32号 (2009年): 126。
- 11 大島透「加藤芳郎さん、47年間 『まっぴら君』ありがとう まっぴら君とその時代」『毎日新聞』2002年11月5日夕刊。
- 12 2007年9月15日号の「地球防衛家のヒトビト」の作品分析は、後注4で示した水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相(後編)」でおこなっている。

【Abstract】

Prime Minister Yoshihiko Noda in Newspaper Comic Strips (Part 1):
An Analysis of Comic Strips in the Three Major
National Newspapers in Japan 2011–2012

Takeya MIZUNO

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Yoshihiko Noda during his tenure, from September 2, 2011 to December 26, 2012.

As the first installment of a multiple-part series, this article (Part 1) explains the purpose, method, and significance of the research, and then highlights quantitative findings.

In the following installments which are planned to appear in upcoming issues, comic strips of *Mainichi*, *Yomiuri* and *Asahi* will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.